

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか』

—教育における発想の転換— (4)

〈本田和子先生講演—前号よりの続き〉

◇司会者から

先ほどの本田先生のお話の最後のところで、「大人と子どもの関係が変わってしまった。つながり方が変わっ

て、質が変わってきた」というお話がございました。

堀合先生も、「これから、どうやって子どもたちとしっかりとつながっていくかが、保育の場で求められてくる」と示唆されました。皆さん、これからの新しい時代をどうイメージするかは様々だと思いますが、

今、何が我々子どもに関わる人たちの課題になっているのか、先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

『自己肯定感』を育むこと

子どもは、つながっていく人を求めているのではないか、私もそう思います。これから保育に限らず、子どもと大人が共に生きる時に一番必要なことは、子どもが「自分の存在を肯定できるようにしてあげる」ところではないでしょうか。つまり、先ほど申し上げましたように、子どもたちは、もしかしたら「子ども嫌い」に向かうかもしれない社会の中に、気の毒なことに生まれてしまう。それから、大人と子どもの関係がバラバラになっている。昔のように自然につながっているという形ではない生活形態の中に置かれてしまふ。そうすると、「自分はこの世にいていいかしら」、つまり変な言い方でございますけれども、「自分はこ

の世界にとって必要な存在なんだ、いてもよい存在なのだ」という、『自己肯定感』が非常に育ちにくいのではないかと思います。

前にこれも酒鬼薔薇事件でしたか、子どもが子どもを殺すという事件があった時に、小学校の先生が、「貴方の命が大切なように他の人の命も大切なよ」という指導をしたら、「僕の命なんか大切じゃないもん」と、子どもが言って大変ショックを受けたというお話を聞いたことがあります。私も、「確かにそうだろうな」という気がいたします。つまり、自分がこの世界に存在することの意義がちよつと確認できない。意義って子どもですから言葉で確認しなくたっていいのです。感覚として、自分の中に「自分はこの世界に生まれてきて、この世界に存在していることに意味があるのだ」というような感じが持てないままに成長していつている。これは非常に不幸なことだし、言葉を尽くして命の大切さや生きる喜びを教えてみて

も、なかなか難しいだろう、と思ったことがございます。

「他人から受け入れられる」経験を通して「自分を受け入れ、他人を受け入れる」ことができる

こういうことって、一番最初に本当に人生の最初の数年間で培われるものだと思います。「自己肯定感」、自分がこの世界に存在することに意味があるのだと感じるのは、「他人から受け入れてもらえるということ」を通してだろうと思います。例えば赤ちゃんが泣くと母親がとんできます（あつ、母親は今の時代、とんでないかもしれません。笑）。とんできたといたします。とんできたら子どもは、自分がこの世にいてもいいってことが分かるのです。自分がサインを出せば、誰かがきてくれるわけですからね。それは自分の存在の肯定になるわけです。自分で自分がこの世に存在してもいいというような肯定感が生まれて、それが少

しずつ育っていく。そうすると「この世に存在しているもいい自分を、存在させてくれる他者がいる」ということに気がつく。「自分を受け入れること」と「他者を受け入れること」ができてようになっていくわけですね。

自分が空っぽなのに、「他人を受け入れなさい、他人と仲良くしなさい、他人の命を尊重なさい」と言っても、それはたぶん言葉だけ、頭だけのことになるであらうと思います。本当にその、先ほど堀合先生は、『心』を『心』で『心』へとか、いろいろ禅問答みたいなことをおっしゃるので難しいのですけれども、心底から自分が存在しているといいということに気づき、自分を存在させてくれる他者、例えば、さつき、泣いた時とんできてくれる母親でも保育者でも誰でもいいんですけれど、そういう人の存在に気づき、そして「自分が生きていくということは、他者に支えられている」ということに気づくということの中で、他者を

尊重するということも育っていくはず』でございますから、本当に『子どもを受け入れる』ということが基本になるのだと思うます。

双子の男の子のエピソードから

今日は折角の機会でございますから、私が大好きなエピソードを一つ申し上げまして、終わりにしたいと思います。これからの子どもたちは、これからの子どもたちに限りませんわね、これからを生きる人間は全てといった方がよろしいかもしれませんが、『異質の他者、自分とは異なった人と共に存在する機会を多く用意すること』は極めて大切であろうと思っております。

そこで最近ちょっとお得意のエピソード、あちらこちらでご紹介申し上げているのですが、一組の双子の男のお子さんをご紹介申し上げます。小学校の今三年生になります、一人の坊やが極めて普通の子ども

で、もう一人は重度の障がいをもって生まれてきました。したがって、車いすの生活をしていて、それもかなり重度で、話すこともできないし、お箸やスプーンを持って食事を口に運ぶこともできない。全て人手を介して、かろうじて生きているという子どもです。この二人、それでも喧嘩したり、健康な方の男の子は時々歯がゆくなつて兄弟をいじめたり、つつついたりするわけですけれども、そういうことをしながらも、もつれ合うようにして仲良く成長して、片方は小学校に入ったわけですね。

ある時、小学校に入った、健康な男の子、仮にK君としておきましょうか。K君が学校から帰ってきた。先生がメモを渡して、お母さまに渡しなさいとお手紙を預けてくださった。お母さまがご覧になったら、「今日K君は学校で大泣きに泣きました。どうしてこんなに泣いたのか分か



りません。理由を聞いても答えません。普段からそんなに泣く子どもではないのでちよつと気になりました。」というお手紙だったようです。お母さまはK君の様子を見ていたのですが、いつもと変わりなくS君の車いすのそばに行つて、ちよつかいを出したり、話しかけたり、話しかけても何も答えないのですけれども、一緒にテレビを見たりしている。だから、なにも聞かない方がいいのかなと思つてそのまましておおきになった。夕飯が終つて、お母さまがお台所で後片づけをしていらしたら、側に寄つてきて何となく物言いたげな風情だったから、「どうしたの」つて聞いたら、急に涙が一杯たまつた。これは聞かなかつた方がよかつたかなと思つて放つておいた。

「役に立たない人が、

生きていていけないことはないよね」

そして、しばらくは、そんな状態で二週間くらい経

過したのでしようか。お母さまも学校の先生もぼつりぼつりと引き出して、結果としてまとめて、こういうことが起こつたんだということが分かつた。というのは、ある男の子が日曜日にお父さまと一緒に競馬のテレビ中継を見た。お父さまは競馬がお好きだったらしくて、いろいろ説明をしてあげた。「あの馬は一番後ろから走つてくるけれど、一番強い馬だから見てご覧、きっと物凄いスピードで追い抜いてトップでゴールへ駆け込むよ」と。そしたらその馬は本当にそういう、大変強い馬だったようで、そうやってトップに駆け込んだ。それで、お父さまは「ほら、ご覧」ということを言つた。初めて競馬なるものに触れたその男の子は大変感心して、「すごいんだね、馬つてみんなあんなにすごいのか?」と聞いたら、「そうじゃない。あの馬たちは、走るために生まれてきて、走るために訓練されているのだ。だから、走ることができなくなつたら、時として殺されてしまうことがあるのだ」と、お父

さまは何気なくそういうことを教えなすったのです。

そのお子さんも、大変新しい情報に触れたわけですから、大変喜んで次の日、お友だちに言いふらしたのですね。「競馬見たことある？ 競馬つてすごいのだよ」というわけでお話をした。そして、「ものすごく（速く）走る馬なのだけれど、もしかして、骨が折れたりなんかして、走れなくなったら殺されちゃうんだって。役に立たないものはいちゃいけないのだから」と、そういうことを言った。そしたらK君は突然泣き出したってわけなのです。

そういうことがやつと分かって、先生からお知らせをいただいた、K君が「うーん」なんて言いながら、「でもね、役に立たないことが生きていていけないことはないよね。役に立たなくなったら、殺しちゃうなんておかしいよね。役に立たない人が生きていていけないなんてあると思う？」なんてことを、繰り返し、繰り返し、執拗に主張した。お母さまはしみじみ、

「これはたぶん、十年くらい何もすることができない兄弟、障がいをもった兄弟と一緒に暮らしてきた一つの成果ではないかと思つた」とおっしゃるのです。

「他人の生命を犠牲にして生きる重荷」を子どもには背負わせたくないという両親の思い

そして、私もそのお話を聞きながら思い出したのは、その方が赤ちゃんをお産みになる前のことなのです。その方というのは、実は私が通う美容院のママさんのお嬢さんなんです。美容院のママさんを通していろんなことをうかがっていたのですが、ママ



さんが、「うちの娘ね、初めて子どもができたのだけれども、出生前診断で見たら双子なのですよ。それはいいのだけれど、片方は重度の障がいをもって出てきて一生障がい者として過ごすに相違ないとお医者様に言われた。お医者様はそれとなく、『どうされますか』と聞かれた」と言うのです。つまり、若い経済的にもそれほど豊かではないサラリーマン夫妻が双子を育てるだけでも大変だ。しかも、片方がとっても重度の障がいをもっていたら、どんなにか大変だろう。今だったら中絶できるといふ示唆だったのではないかと思う。若い母親になろうとしている女性は大変悩んで、実家のお母さまのところ相談にいらしたのでですね。実家のお母さま、美容院のママさんですけれども、「私は何も言っておけることは出来ない。夫婦で良く相談してお決めなさい。どちらを選んでも私は貴方を支持します」ということを言われたそうです。

しばらくしたら、その方が「先生、うちの娘、二人

とも産むそうです」、とおっしゃったんです。私はちよつとびびくりいたしました。「まあ、良くその決心をなすったわね」と言いましたら、「そうなんですよ。私もね、『どうして決心したの?』と聞いたたら、『さんざん考えた末に、もし、二人とも産んで二人とも育てるとしたら、私たちは経済的にもさほど豊かではないから、障がいをもった子どもの世話に明け暮れて、片方の子どもの世話は、もしかしたら少し疎かになるかもしれない。それから、片方の子どもに、十分なことをしてやれないかもしれない。よそのお子さんのように、いい学校に入れたり、いい塾に通わせたりということもしてやれないかもしれない。だから、一人の方が豊かに育てられると思った。」

しかし、成人したあかつきに、その子が、自分の今の幸せは一人の兄弟の命を犠牲にして獲得されたものなのだという事に気づいて、一生の重荷にするということがもし起こったら、私たちは勝手にその子にこ

んな重荷を負わせる権利を持っているのだろうか、そういうことに思っていた。もう運命なのだから、二人とも産んで、とにかく二人を一生懸命育てましようという結論に到達した」。

私は、その話をうかがって本当にびっくりいたしまして、というのは、その美容院ですとお世話になっていたものですから、その方が少女の時代から成長なさるところを存じあげていたのです。そのお嬢さん、どちらかというところ、自分を通そうとする余り、時として周囲と衝突し親御さんを困らせることがあった。その方が、いいお相手が見つかって結婚されたというので、よかったですね、と言っていたら、その人が母親になるうとして、そういうことに巡り合って決断をされたらというので、正直言って大変びっくりいたしました。

異質の他者と共に生きることの意味

そして、やっぱり人は母親になろうとする時、しか

も非常に大きな課題を与えられた時に、急速に成長するものなのだなあ、という思いを強くさせられた例だったのです。

その坊やが、「役に立たない人は、生きていちゃいけないことはないよね、誰だって生きていていいんだよね」と、しきりにそう言った。私はそれを聞いて、「本当にああ、二人お産みになってよかったわね」という気持ちになりました。

その若い母親も実家に帰ってきてしみじみして言われたそうです。「二人産んでよかった、産んでよかったと思う」と。「Kは苦勞しながら成長して、これからも苦勞して成長していくだろうけれども、かけがないものを身につけたのだ」、そういうことを言われたそうです。

そのK君というのは、最初から変な兄弟が傍にいたということになります。自分と同じよう



に動くこともできないし、話すこともできない。そして両親の世話は一方的にその子に注がれる、そういう子どもと一緒に成長しはじめたわけですから、たぶん、その異質の他者、兄弟でありながらもまったく違う他者との共存に、おそらく心の中では葛藤があったり苦労したりしたのだと思うけれども、そのプロセスの中で、人間として一番大切なものを獲得したのかもしれない。

つまり、「生命というのは何ではかることもできない大切なものだ」ということを、この効率主義一辺倒の、役立つことだけが重視されるような社会で、彼はそれを獲得してしまったのだ。私はこの時本当に、異質の他者と共に育つということの意味を改めて感じさせられました。こんな時代だからこそ、効率ということが非常に重視され、合理的に効率的な結果を上げることができるような道だけがよしとされるようなこんな時代だから、逆に効率性を追求しにくい異質な人た

ちと、共に存在しあうこと、これが大切ではないか。

例えば、言葉も通じない、宗教も文化も習慣も違う社会の人たちと、私たちが心を開いて共に生きること、それから子どもたちにもそのような機会を用意する。それが、子ども嫌いが進行するかもしれない、そして子どもが成長しにくい世界の中で子どもたちが成長していくために、極めて大切なことではないかと考えます。とにかく、このエピソードを最後にお話したかったので、お時間を頂戴したことを大変嬉しく思っております。ありがとうございます。

(報告者 首藤美香子)

☆この連載は今回で終わります。